



研究員号③ 令和4年度 研究員グループまとめ

5人それぞれが専門性や経験をいかして、個人テーマのもと研究に取り組みました。個々の研究結果の共通点や相違点、繋がりについて話し合い、グループとして考察したことをお伝えします。

研究グループテーマ

一人一人が主体性を発揮できる学校づくり ～子どもの気づきを起点とした学びを目指して～

個人テーマ

キーワード

研究動画 OR コード

大橋

対話で問いを磨く

～軸を意識した探究のサイクル～

- ・生徒の問いと対話
- ・探究の軸を揃える
- ・探究を進める原動力



百田

澤田

子どもの気づきを学びにつなげる算数の授業づくり

- ・能動的な学びに変わる働きかけ
- ・子どもがめあて設定をする
- ・数学的な見方・考え方を見抜く



対話を通して考え続ける道徳の授業づくり

- ・p4cによる対話の土台づくり
- ・深く考えるためのツール（Qワード）
- ・考える視点の可視化



批判的思考を働かせる国語の授業づくり

- ・批判的読み（何を対象にどんな観点で読むのか）
- ・「読むこと」から「書くこと」への学びの転換
- ・問いが生まれる教材との出会い



多様性を認め合える学級集団づくり

～福井県版ポジティブ教育の学びを活かして～

- ・自他の強みを活かす「レジリエンス」
- ・個と学級集団の往還
- ・多様な他者との協働



栗原

谷江

授業実践から見えてきたこと

どのような見方・考え方を働かせるのかという視点で教材研究を行い、授業づくりをすることで、子どもたちが教科の見方・考え方を軸にして、主体性を発揮できる。

各教育活動から見えてきたこと

協働や対話を通して、自己を見つめたり、他者の考えと向き合ったりすることを繰り返すことで集団の中で主体性を発揮できる。



研究まとめ

今年度の研究を通して、子どもたちに委ねる場面が少し具体的に見えてきました。教師が見方・考え方を明確にした授業づくりをすれば、子どもには自分で学びを進めるための土台ができます。自己理解と他者理解を繰り返すことで、安心感や自尊感情が高まり、互いの思いや考えを尊重して学びを進めるための土台ができます。子どもが主体性を発揮できる教室になるには、子どもと教師のどちらともが、協働的に学ぶ意識をもつことが大切だと感じました。

子どもが主体性を発揮する姿を教師が見取り、価値づけをすることを意識して研究実践を行ってきました。一方で子どもが「何がわかるようになりたいか」「どんな自分になりたいか」を意識していたかという点ではもう少し検討する必要性がありました。子どもたちが自分について力を自覚し、一場面にとどまらず他の場面でも活用しようとすることで、自ら学びを進めていけるのではないかと考えます。友達の活動する姿を見て、自分もやってみようと思える子がいるように、他者との関わりが主体的な学びにつながることも分かりました。子どもたちが主体性を発揮できる場所はそれぞれ違います。どの子にとっても主体性を発揮できる場所がある学校をつくるために、何ができるのかを子どもたちとともにこれからも考え続けていきたいです。

研究を通して、多くの学校、先生方にお世話になりました。本当にありがとうございました。学んだことを今後も嶺南地区の各学校、先生方に還元していきたいと思います。個人研究のまとめは、研究員号（個人まとめ）で詳しくお伝えします。

「対話で問いを磨く～軸を意識した探究のサイクル～」

研究員
大橋 敏明



生徒が意欲をもって、自分事として学んでいくには…

困った時でも、粘り強く取り組んでほしいな…

生徒の探究に教師はどう働きかけたらいいんだろう…



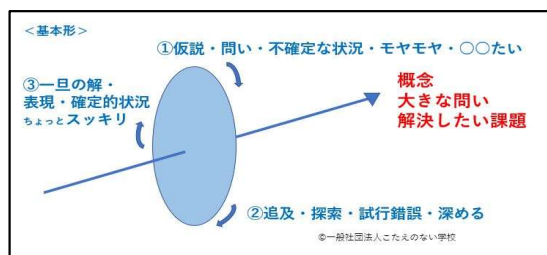
生徒の問いから、探究の軸を設定して、常に

意識しながら探究学習を進めていけば、自分

事として粘り強く探究に取り組むのでは…

探究の軸とサイクル ～一般社団法人こたえのない学校 代表理事 藤原さと氏の考えを参考にしました～

藤原さと氏「探究のイメージ図」



一般社団法人こたえのない学校ホームページ(2018.11.20)より

👉 このイメージから、私は「探究の軸」と「探究のサイクルを回す原動力」を以下のように捉えて実践を行いました。

「探究の軸」

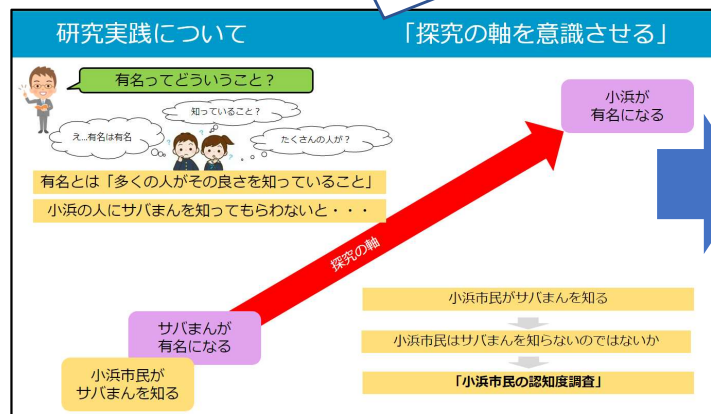
=探究する「大きな問い」「解決したい課題」に向かう方向性

「探究のサイクルを回す原動力」

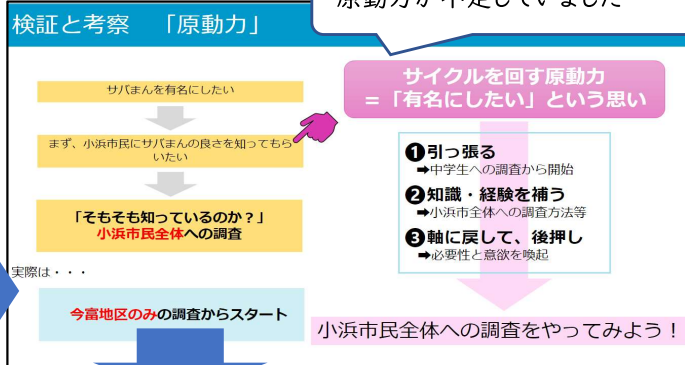
=モヤモヤ(問い)をスッキリしたい(解決したい)という思い

授業実践では

生徒の問いをもとに、対話で、探究の軸を揃えました



原動力が不足していました・・・



この後の再調査から生まれた問いをもとに、探究が進みました。過程では、生徒が困難な状況に向き合いながら、粘り強く学びを進めようとする生徒の姿を見ることができました。詳しくは、研究動画(QRコード)をご覧ください。

考察・まとめ

生徒が連続する問いを解決するために大切だったこと

- ① 生徒の問いから軸を設定することが探究のサイクルを回す原動力になる。
- ② 教師は寄り添うだけでなく、探究のサイクルが回りにくい時に動力を補うために働きかける。
- ③ 生徒と教師が同じ探究の軸を共有することで軸からはずれそうになる生徒の思考に気づく。
- ④ 生徒を軸に戻す。

★見取りと評価について

「何ができたか」という結果ではなく、「どのように問いに
向き合っているか」という過程の姿を丁寧に見取り、評価する
ことが大切でした。そのためには、探究の過程で問いに向き
合おうとする生徒の姿を具体的にイメージできていなければ、
教師の関わり方や評価が変わってしまうことが分かりました。

★嶺南教育実践フォーラムを通して学んだこと

探究学習で働かせる「教科で培った見方・考え方」について具体的にイメージする必要性を強く感じました。どこで、どの見方・考え方を働かせていくのかを教師と生徒が確認しながら学習を進めていくことや、生徒に見方・考え方の働かせ方を気づかせていくことの大切さが分かりました。

批判的思考を働かせる国語の授業づくり

研究員 谷江久美子

言葉にこだわって読み、絶えず問いを発しながら文章に関わる姿を引き出したい！



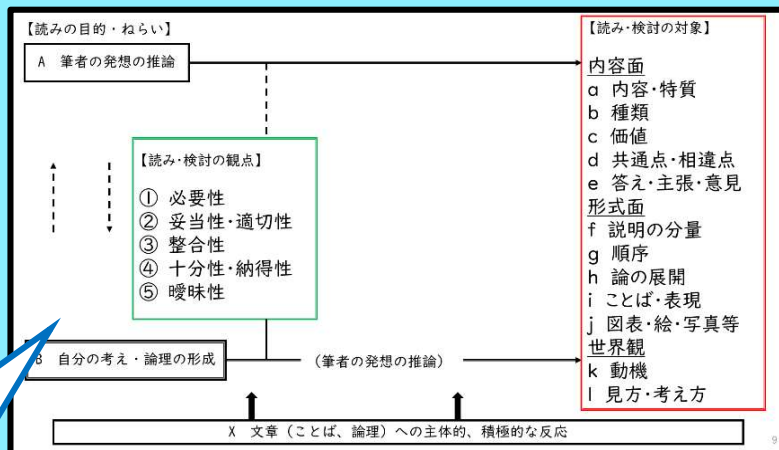
そのために、兵庫教育大学大学院教授
吉川芳則先生の批判的読みの理論を参
考に教材研究を行いました。

批判的思考の特徴、あり方

- ◎粗探しをすること、文句をつけることではない。よいものはよい、よくないものはよくないという態度姿勢であること。
- ◎根拠に基づいて考えを導き出せているか、その考えは正しいか、確かであるか問うこと。
- ◎物事を多面的に捉えること。本質は何か見抜くこと。

実際に文章を読んでいくときに、どんな言葉や表現を用いているか、何をどのように書き表しているかなど(a~i)を「対象」として、それらがどうか、ふさわしいかなど(①~⑤)の「観点」で文章を検討していくことで、「A筆者の発想の推論」「B自分の考え・論理の形成」につながっていきます。

【批判的読みの基本的なあり方】



「論理的思考力を育てる！批判的読み（クリティカル・リーディング）の授業づくり
—説明的文章の指導が変わる理論と方法—」（吉川芳則 2017 明治図書）

こんな実践をしました！

すがたをかえる大豆（国語三下 光村図書）

事例の内容と順序を対象に、事例の順序が適切かどうかという観点で検討する。【対象】内容・特質 順序 【観点】適切性

まず、子どもたちが「いちばんすがたをかえている」と思う順に事例を並べかえて提示し、筆者の事例の並べ方と比べました。



筆者はなぜこの順に事例を並べたんだろう。

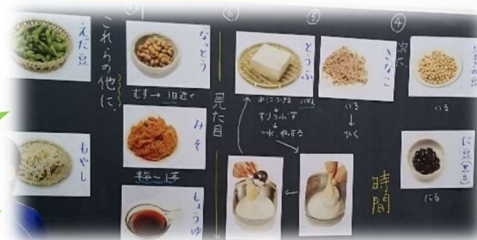
子どもたちの中から新しい問いが生まれました。

「いちばんわかりやすいのは」って書いてある。

じゃあ枝豆ともやっしていちばんわかりにくいから最後のの？

「これらのほかに」って書いてあるからこれまでの事例と何か違うのかも。

「とりいれる時期や育て方をくふうした食べ方もあります。」って書いてある。



文章に書いてあることから根拠を見つけ、事例の違いを考えていました。

大豆って、見てわかるもんな。

事例の内容を自分の経験や生活と結び付けて、わかりやすさについて考えていました。

【読み・検討の「対象」・「観点」】をもとにする

教師 …授業でどの言葉、どの文章にこだわって読むと良いのかが考えやすくなり、問いが生まれるような教材との出会わせ方や読み方が明確になりました。

子ども …言葉にこだわって考えたり、自分と他者を比べて思考したりしやすくなりました。
教科の見方・考え方を軸にして思考し、自然と文章に向かう姿が見られました。

子どもが「言葉にこだわって読むって楽しいな！」と思えるような授業づくりをこれからも目指していきます。

多様性を認め合える学級集団づくり～福井県版ポジティブ教育の学びを活かして～

研究員 栗原 晃子

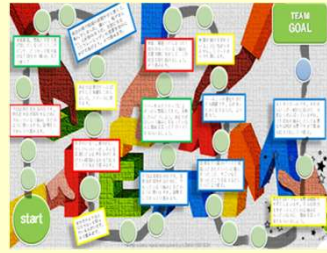
昨年度の実践から



自他の強みを活かす学びのサイクルって？

土台となるスキルプログラム

～「福井県版ポジティブ教育プログラム」レジリエンス教育より～

24の強み
自他の強みを知る強みteamすごろく
強みの使い方を知る秘密の友達～強み見つけ隊～
強みの可視化し内化する

個と学級集団の往還



学校行事で強みを活かす「学びのサイクル」



「学びのサイクル」

- ①練習：土台となるプログラムで必要なスキルを学ぶ
- ②計画：スキルを行事でどのように使い、仲間と協働して学校行事に向かうかを計画する（ピア・サポートプラン）
- ③活動：計画したことを学校行事でやってみる
- ④振り返り：活動を振り返り、次に必要なことを考える

この「学びのサイクル」を1度ではなくて、いくつかの行事で繰り返し回していくことで、学級集団の力が高まっていくよう組み立てた。

子ども達が気づきにくい自らの成長が見える化・意識化

教師が価値づけ＆フィードバック

自分の成長と学級の成長を実感

自分や学級を大切にしようという気持ち



他者の存在は、自分らしさを磨いたり、自分の存在価値を見出したりする上で大きな役割を果たしていると分かりました。その他者の存在があるのが学級であり、学校です。子どもと教師がつながること、子どもと子どもをつなげること、その子が自分自身とつながることを大切に「一人一人が自分らしく輝ける」学級集団を作っていきたいと思いました。

子どもの気づきを学びにつなげる算数の授業づくり

研究員

澤田 雄輝

こんな悩み

ありませんか？

(私の困り感)

自分の授業づくりを
アップデート
するチャンス

願い

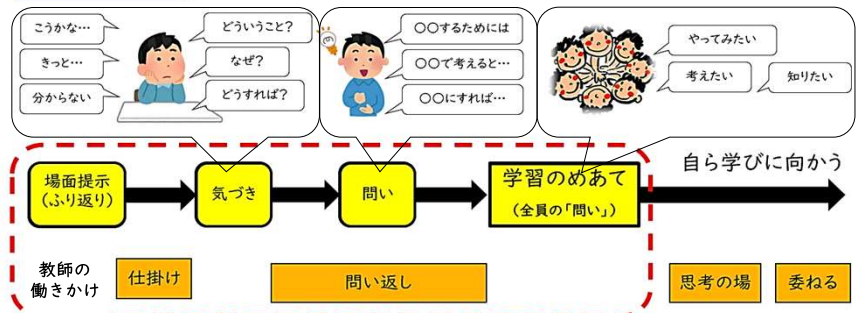


全員参加できるような授業づくりが難しい。

教師が丁寧な教材準備や説明をしすぎて、
子どもの学習意欲を削いでしまう。一人ひとりの柔軟な考え方や発想、表現など
価値ある気づきを大切に授業をしたい。「やりたい・考えたい・知りたい」という
思いを持って主体的に学びに向かってほしい。子どもの「気づき」「問い」をもと
に子どもたちがめあて設定すること
で、一人ひとりの自ら学びに向かう
とする姿を引き出せるのでは…。

授業の流れ

場面提示からめあて設定までの過程に着目



関西大学初等部

尾崎 正彦 先生の

授業づくりの理論を
参考にしました。

研修講座STEP

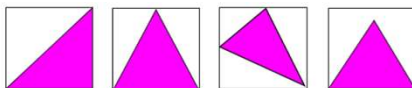


授業実践 でこんなことがありました

場面提示の仕掛け

折り紙（一辺10cm）におさまる
一番大きな三角形をつくろう。

(予想) 考え



(予想) 気づき

一番大きいのは？ どうやって比べれば？

(予想) 問い

重ねると 変形すると 計算すると マスを使うと

(予想) めあて

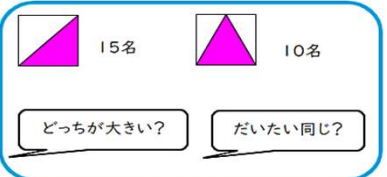
(4年生の学習を使って) 三角形の面積の求め方を考えよう。



なぜ？

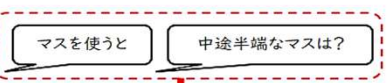
変形する・重ねる・計算するなど、
大切な見方・考え方が働かない

(実際) 考え



(実際) 気づき

(実際) 問い



(実際) めあて

三角形の面積を比べよう。

授業を問い直すことで大切な授業づくりの視点が

フォーラムにもたくさんの学びがありました。
ご参加いただきありがとうございました。教材研究 (本時の見方・考え方を**見抜く**)

- ① 本単元に関わる既習内容
- ② 子どもたちの①の理解・定着はどうか
- ③ 本単元で大切にすべき見方・考え方とは
- ④ どのような気づきや問いをねらうか
- ⑤ どのような仕掛けによって④が実現するか
- ⑥ 今後の学習にどうつながるか

学習の土台となる学級づくり

- ① 子どもの気づきを『**キャッチ & 問い返し**』
⇒ 聴いてくれる・理解してくれる・つないでくれる
(安心して発言できる人間関係・雰囲気)
- ② 『**めあてをもつ & ふり返し**』を大切に
⇒ 自分で決めたことに向かっていく経験
どうだったかを自分で見つめ直す経験

教育活動全般で
大切にしたい!!

研究員

百田 亜沙美

「対話を通して考え続ける道徳の授業づくり」

子どもたちが「双方向のやりとり」から考えを深めていく授業にするためにはどのような工夫が必要か―。子どもの気づきを起点とした「対話」を大切に、互いの思いを伝え合う中で考えを深める授業を目指しました。手立てや実践から見えてきたものについて報告します。

道徳授業の悩み・・・



子どもたちが互いの考えを交流する中で
自ら考えを深めていく授業にしたい!

道徳における対話が、よりよい生き方を探るために、立ち止まったり考え続けたりするきっかけになってほしい!

立命館大学大学院・荒木寿友教授は、対話について「教える－教えられるの関係ではなく、お互いが対等な関係で批判的探究を行うこと」と定義されています。

批判的探究とは、自分たちが当たり前だと思っていることや自分の価値観について問い直し、「それなら納得できる」と、お互いに合意できる点を探ってみようとする視点で考えることです。右図のように、会話のできる関係性、つまり安心して話したり聴いたりできる関係性が築かれたうえで「対話」を行うことが可能となり、その「対話」に基づいて、考え、議論をしていくことがこれから生きていくうえで必要な力となってきます。



荒木寿友

「いちばんわかりやすい道徳の授業づくり
対話する道徳をデザインする」

対話から考えを深めるために・・・

〈対話の土台作り〉

朝活動においてp4c（探究の対話）に取り組む中で深く考えるためのツール「Qワード」を活用し、物事を掘り下げて考える体験を重ねました。



どんな? 本気に? どういうこと?
なんで? たとえば? 反対は?

Qワードがあると、どうやって考えればよいか、友だちの意見にどう返したらいいかがわかりやすかった。→考える視点の可視化

〈対話で言葉をつなぐ〉

自分のもつ価値観への気づきや、教材への気づきを起点に対話を行うことで、道徳的価値に対する思考の深まりをねらいました。



授業の際は、明確なねらいのもとに子どもの言葉をつなぐよう意識しました。
明確なねらいについては
昨年のSTEPをご覧ください。



対話から考え続ける道徳授業のために

正解のない問いに対して
考え続ける姿

対話

考える視点の
明確化双方向の
やりとり

明確なねらい

安心して話せる聴ける関係性

実践を通して分かったこと

- ・安心して話したり聴いたりできる関係性を築くことで対話を行う土台ができる。
- ・導入時にじっくり考える時間をとることで、価値観への気づきを引き出すことができる。
- ・教師と子どもが可視化された考える視点を共有しながら対話を行うことで、自己を見つめたり、多面的・多角的に物事を捉えたりしやすくなる。

自分との対話、友達との対話、教材との対話から今までの自分を振り返ったり、これからの自分について考えたりできるからこそ、道徳で「対話」を大切にしたいと感じました。